



前 入 学 試 験 問 題

国 語 (理科)

(配点八〇点)

平成二十一年二月二十五日 九時三〇分～一一時一〇分

注 意 事 項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で十七ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 四、解答用紙の指定欄に、受験番号(第一面二箇所)、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 六、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 七、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白や裏面には、何も書いてはいけません。
- 八、この問題冊子の余白は、草稿用に使ってもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 九、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
- 十、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

白は、完成度というものに対する人間の意識に影響を与え続けた。紙と印刷の文化に関係する美意識は、文字や活字の問題だけではなく、言葉をいかなる完成度で定着させるかという、情報の仕上げと始末への意識を生み出している。白い紙に黒いインクで文字を印刷するという行為は、不可逆な定着をおのずと成立させてしまうので、未成熟なもの、ギンミ^aの足りないものはその上に発露されてはならないという、暗黙の了解をいざなう。

推敲^{すいこう}という言葉がある。推敲とは中国の唐代の詩人、賈島^{かとう}の、詩作における逡巡^{しゆんじゆん}の逸話である。詩人は求める詩想において「僧は推す月下の門」がいいか「僧は敲く月下の門」がいいかを決めかねて悩む。逸話が逸話たるゆえんは、選択する言葉のわずかな差異と、その微差において詩のイメージーションになるほど大きな変容が起こり得るといふ共感が、この有名な逡巡を通して成立することであろう。月あかりの静謐^{せいひつ}な風景の中を、音もなく門を推すのか、あるいは静寂の中に木戸を敲く音を響かせるかは、確かに大きな違いかもしれない。いずれかを決めかねる詩人のデリケートな感受性に、人はささやかな同意を寄せるかもしれない。しかしながら一方で、推すにしても敲くにしても、それほどの逡巡を生み出すほどの大事でもなかるうという、微差に執着する詩人の神経質さ^b、キリヨウの小ささをも同時に印象づけているかもしれない。これは「定着^ア」あるいは「完成」という状態を前にした人間の心理に言及する問題である。

白い紙に記されたものは不可逆である。後戻りが出来ない。今日、押印したりサインしたりという行為が、意思決定の証として社会の中を流通している背景には、白い紙の上には訂正不能な出来事が固定されるといふイメージーションがある。白い紙の上に朱の印泥^{いんでい}を用いて印を押すという行為は、明らかに不可逆性の象徴である。

思索を言葉として定着させる行為もまた白い紙の上にペンや筆で書くという不可逆性、そして活字として書籍の上に定着させるというさらに大きな不可逆性を発生させる営みである。推敲という行為はそうした不可逆性が生み出した営みであり美意識であろう。このような、^イ達成を意識した完成度や洗練を求める気持ちの背景に、白という感受性が潜んでいる。

子供の頃、習字の練習は半紙という紙の上で行った。黒い墨で白い半紙の上に未成熟な文字を果てしなく発露し続ける、その反復が文字を書くトレーニングであった。取り返しのつかない結末を紙の上に^{あらわ}顕し続ける呵責^{かしやく}の念が上達のエネルギーとなる。練習用の半紙といえども、白い紙である。そこに自分のつたない行為の痕跡^{こんせき}を残し続けていく。紙がもつたないというよりも、白い紙に消し去れない過失を累積していく様を把握^{はあく}し続けることが、おのずと推敲という美意識を加速させるのである。この、^ウ推敲という意識をいざなう推進力のようなものが、紙を中心としたひとつの文化を作り上げてきたのではないかと思うのである。もしも、無限の過失をなんの代償もなく受け入れ続けてくれるメディアがあったとしたならば、推すか敲くかを逡巡する心理は生まれてこないかもしれない。

現代はインターネットという新たな思考経路が生まれた。ネットというメディアは一見、個人のつぶやきの集積のようにも見える。しかし、ネットの本質はむしろ、不完全を前提にした個の集積の向こう側に、皆が共有できる総合知のようなものに手を伸ばすことのように思われる。つまりネットを介してひとりひとりが考えるといふ発想を超えて、世界の人々が同時に考えるところな状況が生まれつつある。かつては、百科事典のような厳密さの問われる情報の体系を編むにも、個々のパートは専門家としての個の書き手がこれを担ってきた。しかし現在では、あらゆる人々が加筆訂正できる百科事典のようなものがネットの中を動いている。間違いやいたずら、思い違いや表現の不的確さは、世界中の人々の眼に常にさらされている。印刷物を間違いない世に送り出す時の意識とは異なるプレッシャー、良識も悪意も、^{ちやうしやう}嘲笑も尊敬も、^や揶揄も批評も一緒にした興味と関心が生み出す知の圧力によって、情報はある意味で無限に更新を繰り返しているのだ。無数の人々の眼にさらされ続ける情報は、変化する現実限りなく接近し、寄り添い続けるだろう。断定しない言説にシンギ^cがつけられないように、その情報はあらゆる評価をカイヒ^dしなが

ら、^エ文体を持たないニュートラルな言葉で知の平均値を示し続けるのである。明らかに、推敲がもたらす質とは異なる、新たな知の基準がここに生まれようとしている。

しかしながら、無限の更新を続ける情報には「清書」や「仕上がる」というような価値観や美意識が存在しない。無限に更新され続ける巨大な情報のうねりが、知の圧力として情報にプレッシャーを与え続けている状況では、情報は常に途上であり終わりがない。

一方、紙の上に乗るということは、黒いインクなり墨なりを付着させるという、後戻りできない状況へ乗り出し、完結した情報を^eジョウジユさせる仕上げへの跳躍を意味する。白い紙の上に決然と明確な表現を屹立^{きつりつ}させること。不可逆性を伴うがゆえに、達成には感動が生まれる。またそこには切り口の鮮やかさが発現する。その営みは、書や絵画、詩歌、音楽演奏、舞踊、武道のようなものに顕著に現れている。手の誤り、身体の不れ、鍛錬の未熟さを超克し、失敗への危険に臆^{おそ}することなく潔く発せられる表現の強さが、感動の根源となり、諸芸術の感覚を鍛える暗黙の基礎となってきた。音楽や舞踊における「本番」という時間は、真つ白な紙と同様の意味をなす。聴衆や観衆を前にした時空は、まさに「タブラ・ラサ」、白く澄みわたった紙である。

弓矢の初級者に向けた忠告として「諸矢^{もろや}を手挟^{たばさ}みて的に向かふ」ことをいさめる逸話が『徒然草』にある。標的に向かう時に二本目の矢を持って弓を構えてはいけない。その刹那^{せうな}に訪れる二の矢への無意識の依存が一の矢への切実な集中を鈍らせるという指摘である。この、^オ矢を一本だけ持つて的に向かう集中の中に白がある。

(原研哉『白』)

〔注〕 ○タブラ・ラサ——tabula rasa (ラテン語) 何も書いてない状態。

設問

- (一) 「定着」あるいは「完成」という状態を前にした人間の心理（傍線部ア）とはどういうことか、説明せよ。
- (二) 「達成を意識した完成度や洗練を求める気持ちの背景に、白という感受性が潜んでいる」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。
- (三) 「推敲という意識をいざなう推進力のようなものが、紙を中心としたひとつの文化を作り上げてきた」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。
- (四) 「文体を持たないニュートラルな言葉で知の平均値を示し続ける」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。
- (五) 「矢を一本だけ持つて的に向かう集中の中に白がある」（傍線部オ）とはどういうことか。本文全体の論旨を踏まえた上で、一〇〇字以上二二〇字以内で説明せよ。（句読点も一字として数える。なお採点においては、表記についても考慮する。）
- (六) 傍線部 a、b、c、d、e のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a ギンミ b キリヨウ c シンギ d カイヒ e ジョウジュ

第二 問

次の文章は、左大将邸で催された饗宴きやうえんで、源仲頼(少将)が、左大将の愛娘まなむめ あて宮(九の君)をかいま見た場面である。これを読んで後の設問に答えよ。

かくて、いとおもしろく遊アびののしる。仲頼、屏風びやうぶふたつがはさまより、御簾みさのうちを見入るれば、母屋もやの東面ひがしおもてに、こなたかなたの君たち、数を尽くしておはしまさふ。いづれとなく、あたりさへ輝くやうに見ゆるに、魂たましひも消え惑ひてものおぼえず、あやしくきよらなる顔かたちかなと、こちそらなり。なほ見れば、あるよりもいみじくめでたく、あたり光り輝くやうなる中に、天女くんだりたるやうなる人あり。仲頼、これはこの世の中に名立なだたる九の君なるべし、と思ひよりに見るに、せむ方なし。限りなくめでたく見えし君たち、このいま見ゆるにあはすれば、こよなく見ゆ。仲頼、いかにせむと思ひ惑ふに、今宮ともろともに母宮の御方へおはする御うしろで、姿つき、たとへむ方なし。火影ほかげにさへこれはかく見ゆるぞ。少将思ふにねたきこと限りなし。われ何せむにこの御簾のうちを見つらむ。かかる人を見て、ただにてやみなむや。いかさまにせむ。生けるにも死ぬるにもあらぬこちして、例の遊び、はたまして心に入れてしゐたり。夜ふけて、上達部かむだちめ、親王みこたちもものかづき給たまひて、いちの舍人とねりまでものかづき、禄ろくなどしてみな立ち給ひぬ。

仲頼、帰るそらもなく、家に帰りて五六日、かしらももたげで思ひふせるに、いとせむ方なくわびしきこと限りなし。になくめでたしと思ひし妻めも、ものともおぼえず、かたときも見ねば恋ひしく悲しく思ひしも、前に向かひゐたれども、目にも立たず。身のならむことも、すべて何ごととも何ごととも、よろづのこと、さらに思ほえであるときに、「などか常に似ず、まめだちたる御けしきなる」といふ。少将、「御ためにはかくまめにこそ。あだなれとやおぼす」などいふけしき、常に似ぬときに、女、「いでや、

あだごとはあだにぞ聞きし松山や目に見す見すも越ゆる波かな」

といふときに、少将思ひ乱るる心にも、なほあはれにおぼえければ、

「浦風の藻を吹きかくる松山もあだし波こそ名をば立つらし

あがほとけ」といひて泣くをも、われによりて泣くにはあらずと思ひて、親の方へ往ぬ。

『うつほ物語』

〔注〕 ○こなたかなたの君たち——左大将家の女君たち。

○今宮——仁寿殿の女御(あて宮の姉)腹の皇女。左大将の孫にあたる。

○母宮——あて宮の母。

○あだごとはあだにぞ聞きし——あなたの浮気心は、いい加減な噂と聞いていました。

○松山——陸奥国の歌枕。本文の二首の歌は、ともに、『古今和歌集』の「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ(もし、あなた以外の人に、私が浮気心を持ったとしたら、あの末の松山を波も越えてしまうでしょう。

そんなことは決してありません)」を踏まえる。

○あだし波こそ名をば立つらし——いい加減な波が、根も葉もない評判を立てているようです。

設
問

- (一) 傍線部ア・イ・エを現代語訳せよ。
- (二) 「かしらももたげで思ひふせる」(傍線部ウ)とあるが、どのような様子を述べたものか説明せよ。
- (三) 「われによりて泣くにはあらずと思ひて」(傍線部オ)を、必要な言葉を補って現代語訳せよ。

第三問

次の文章は、室町時代の禅僧、万里集九ばんりしゅうくが作った七言絶句と自作の説明文である。これを読んであとの問いに答えよ。

宋そう之神廟しんべう謂ヒテ趙鉄面てうてつめん曰ク、「卿けい入リタルトキ蜀しよく以テ一琴一亀いつしんいつくわ自随ラハ為スコト政ヲ

簡易也ト。一日余友人、袖しうシテ小画軸せうがしゆ来リ見ラル需メ賛語さんご。不知ラ為ルカラ何ノ凶ト。

掛ケルコト壁間へきま逾コエ月ツキ坐臥ざふし質ただ焉ヲ。梅ハ則チ花中はなちゆう御史ごうし表ス趙抃てん之ノ為ル鉄面御てつめんご

史シ。屋頭おくづ長松ちやうそう之屈蟠くつぱん而ハ有ル大雅風声たいがふふうせい者ハ豈ニ非ズ一ニ張琴ちやうしん邪ニ。一亀いつくわ亦タ

浮ユ游ス水上すいじやう。神廟しんべう之片言せんべん頗ル与ト絵事えじ合ス符ヲ。名なづケテ之ノ曰ハバ「趙抃一亀てんいつくわ

凶ト、則チ可ナラン乎ヲ。

莫^レ怪^ム床頭^ニ不^レ置^カ d 長松毎日送^ニ遺音^ヲ

主人^ノ鉄面^ニ有^{リヤ}何^ノ樂^{シミ} 唯^ダ使^{ムルノミ}一^ニ龜^{ヲシテ}知^ニ此^ノ心^ヲ

〔梅花無尺藏〕

〔注〕 ○神廟——北宋の神宗皇帝(在位一〇六七—一〇八五)。 ○趙鉄面——趙抃が剛直だったためについたあだ名。

○蜀——地名。今の四川省のあたり。 ○余——筆者である万里集九。 ○贊語——画面に書きそえる詩やことば。

○御史——官僚の不正行為を糾^たす官職。 ○屈蟠——くねくねと曲がる。

○張——弓・琴など弦を張つた物を数えることば。 ○遺音——音が消えたあとで残る響き。

設問

(一) 「掛^ニ壁^ニ間^ニ逾^レ月、坐臥質^レ焉」(傍線部 a)とあるが、なぜそうしたのか、説明せよ。

(二) 「豈^ニ非^ニ一^ニ張^ニ琴^ニ邪」(傍線部 b)をわかりやすく現代語訳せよ。

(三) 「神廟之片言、頗与^ニ絵事^ニ合^レ符」(傍線部 c)とあるが、ここで「絵^ノ事」が指しているものを文中から抜き出して三つあげよ。

(四) 空欄 d にあてはまる文字を、文中から抜き出せ。